
星になった女神

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星になつた女神

【Nコード】

N8940P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

アステカの女神コヨルシヨウキ。彼女は母の出産に反対し殺されるが母の愛によって。アステカ神話のお話を書いてみました。

第一章

星になった女神

かつてアステカにコヨルシヨウキという女神がいた。

豊穡の女神であり頭には蛇の血で染められた鷲の羽根の冠があり耳には魔法の鈴がある。そうしていつもトウモロコシを見ていた。

その彼女であるが潔癖症であり生真面目な性格であった。何に対しても厳しくとりわけ男女関係といったものについてはだ。かなり厳しかった。

それは誰に対しても同じでだ。母であるコアトリクエにもよく言っていた。

「男女関係はしつかりしないといけません」

「いつもそう言うわね」

「当然です。夫は一人、妻は一人」

こう言うのである。強い口調でだ。

「そして相手がはつきりとしないとです」

「駄目なのね」

「そうです、父や母のわかっていない子なぞです」

言葉はさらに過激なものになる。そしてであった。

こう言い切るのだった。

「存在してはいけません」

「それはどうしてもなのね」

「はい、どうしてもです」

険しい顔で語る。

「おわかりでしょうか」

「あまり。そういうことは」

しかしであった。ここでその母神は言うのであった。

「言わない方がいいのではないかしら」

「いえ、言います」

「コヨルシヨウキの言葉は変わらない。

「何かあるうともです」

「そうなのね」

「若しそういう神がいれば」

「また話す彼女だった。」

「私が存在自体を許しません」

「倒すというのね」

「そうします。誰であっても」

「こう話してでった。彼女は己の頑迷とまで言える強い主張をするのだった。しかしであった。ここでそのコアトリクエであった。

「妊娠したのだ。そしてその相手はだ。」

「わからないというのね」

「はい」

「そうです」

「コヨルシヨウキに彼女の弟神や妹神達が答える。彼女には四百の弟や妹達がいるのだ。」

「今度の子はです」

「全くわかりません」

「そうなの、わかったわ」

「それで姉上」

「どうされますか？」

「弟妹神達が彼女に問うた。」

「それで」

「これは」

「決まっているわ」

「コヨルシヨウキは険しい顔で彼等に述べる。」

「止めさせるわ」

「母上をですか」

「そうされると」

「ええ、お母様には悪いけれど」

母を氣遣いはする。そうした意味で彼女も娘であった。しかしそれ以上にだ。その正義感と潔癖が彼女を動かしているのであった。

「その子を産むのはね」

「止めて頂く」

「左様ですか」

「そうですね、それでは」

「今より」

「行くわよ」

こう言つてであった。彼女はその四百柱の弟神や妹神を引き連れてそのうえで母の下へ向かう。その手にはそれぞれ武器もあった。

「母上！おられますね！」

母がいるコアテベツクの山に来た。その麓での言葉だった。

「今からそちらに参ります！」

「我等も！」

「いますぞ！」

弟神達も言う。今彼等はその頂上を見上げて叫んでいる。

「父のわからぬ子なぞ産ませはしませぬ！」

「そう、決して！」

「それは許されぬこと！」

彼等は口々に叫ぶ。そうしてだった。

そのまま山を駆け上つてだった。母神に迫る。

「母上！」

コヨルシヨウキはその先頭にいた。自ら剣を持っている。それが黒い輝きを見せている。

第二章

「その子、どうあっても！」

「コヨルシヨウキ、それは」

上からだった。その母神の声がしてきた。

「詳しい話はするけれど」

「なりません！」

言い訳にしかきこえなかった、彼女にはだ。

「その子、決して産ませはしません」

「けれどもう」

「もう!?!」

「産まれてしまったの」

申し訳なさそうな声も出すのだった。

「その子は」

「ならばです」

「ならば?」

「殺すまで」

コヨルシヨウキのその声だ。さらに鋭いものになったのだった。

「その子をです」

「この子は」

「何だというのですか!」

山を駆け上がりながらだ。そのうえで言葉である。その後ろには弟神、妹神達が続いている。まさに嵐の如き進みであった。

「父のわからぬ不義の子なぞ決して!」

「許さないというのか」

しかしここでだ。他の声がしてきたのだった。

「それは決して」

「?この声は」

「いいだろう」

若い男の声だった。それが山の頂上から聞こえてきたのである。

「ならば来るのだ」

「山の頂上にか」

「そうだ、来るのだ」

「コヨルシヨウキを挑発するようにだ。こうやってきたのである。

「いいな、来るのだ」

「言われずとも」

「コヨルシヨウキとしてもだ。その言葉で止まることはなかった。

「そのつもりだ。行くぞ」

「来るがいい」

声はまだ彼女を誘っていた。そうしてだった。

「コヨルシヨウキは遂に頂上まで来た。そこにいたのはだ。

全身が眩く輝く青年がいた。虹色の服を着てその頭にはコンドルの羽根がある。その青年がコヨルシヨウキに対して言ってきた。

「私を認めないのか」

「そうだ、認めはしない」

精悍な顔のその青年を見ての言葉だった。誰なのかはすぐにわかった。

「母上の子とはいえ。不義の子なぞは」

「そうか、認めないか」

「決してだ」

それを言うのだった。

「何があるうとも。貴様を殺す」

「殺すか」

「覚悟するがいい」

右手に持つその剣を突き出してだ。告げたのであった。

「今ここでだ。斬る」

「いいだろう。それならばだ」

青年神は彼女のその言葉を受けた。そうしてであった。

右手から何かを出してきた。左手にもだ。

右手には火の玉を出し左手には剣だ。赤く輝く剣だった。

それ等を両手に出してだ。あらためてコヨルシヨウキに告げる。

「来るがいい」

「来いというのか」

「そうだ、相手になろう」

「大人しく倒されていれればいいものを」

コヨルシヨウキは生まれたばかりの相手にやられる筈がないと思っていた。それは確信だった。この辺りでは歳を重ねれば重ねる程力を増すと思われているからだ。

第三章

だからこそだった。今ここでその青年神に斬りかかった。しかしであつた。

まずはその右手の火の玉が放たれた。それは一直線に飛びコヨルシヨウキの心臓を貫いた。まさに一撃でそれが終わったのである。コヨルシヨウキはそれで後ろに倒れようとする。だが青年神のその動きは止まらず後ろに倒れようとする彼女のその首を刎ねてしまった。

赤い剣が右から左に一閃された。それで首を刎ねたのだ。首を刎ねられた彼女の身体は山の頂上から転がり落ちる。弟神や妹神達もそれを見る。

「姉上！」

「これは一体！」

だがもう彼女は何も言えない。そのまま身体は山を転がり落ち手も足もその中でぶつけてひしゃげ千切れていく。後には手足がなくあちこち傷だらけの無惨な亡骸があつた。

そしてだ。残つた彼等にも頂上から青年の声が届いた。

「コヨルシヨウキは死んだ！」

まずはこのことが告げられた。

「私を認めぬから斬つた。今彼女は死んだ」

「死んだ………」

「姉上が」

「そしてだ」

彼はさらに言うのであつた。

「我が名はウイツロポチトリという」

「ウイツロポチトリ？」

「それが」

「そつだ、太陽神の名だ」

「こつ名乗るのであった。

「そして父はいる」

「何っ!?!」

「いるというのか!?!」

「まさか」

「いるのだ」

こつ話すのである。兄神や姉神達にだ。

「今それを言おう」

「まさか」

「それでは今まで我々は」

「早まったというのか」

「そうだ、結果としてそうなる」

彼等を見下ろしながらの言葉だった。

「我が父はテスカトリポカ」

「何っ、テスカトリポカだと」

「あの方だったというの!?!」

「まさか」

「だが事実だ」

それでもだ。彼は言うのであった。

「私の父はテスカトリポカだ。それを言おう」

「何ということだ」

「戦いの神が父だったというのか」

「そうだったの」

「言おうと思っていました」

ここでコワトリクエもだ。我が子達に言ってきた。

第四章

「しかし。それを言えずにいて」

「それで今こうして」

「この神を生まれたというのですか」

「ええ、言えなくて。テスカトリポカには既に妻がいるから不義であるというのだ。しかしそれでも良かった。」

「それでも。私は」

「確かに私は不義の子だろう」

「ウィツロポチトリもそれは認めた。」

「しかしだ」

「しかし」

「それでも？」

「若しそれで私に至らぬところがあれば言うといい
胸を張っての言葉であった。」

「父テスカトリポカも認めるし母コワトリクエもだ。それを認める」

「認めるということは」

「つまりは」

「そうだ、私を殺せばいい」

「胸は張ったままだ。言ってみせたのだ。」

「その時はな」

「むう……」

「しかしそれは」

「不義かどうかは問題ではない」

「ウィツロポチトリはまた話した。」

「それよりも資質が問題ではないのか」

「資質が」

「それこそが」

「父と母が生まれなければいいと思えばそれまでだが」

しかしそれでもだというのだ。

「だが。資質こそが大事ではないのか」

「では姉上は」

「それは」

「間違っていたのだ。だからこそ私は倒した」

そうだったというのだ。彼は話しながら眼下に無惨な屍を晒しているコヨルシヨウキを見ていた。彼女は当然ながら事切れている。

「今こうしてだ」

「けれど」

だがここでだ。クワトリクエが言うのだった。

「このままではコヨルシヨウキが」

「そうですね、気の毒です」

「あまりにもです」

弟神や妹神達もここで言う。

「母上、ですからここは」

「姉上は確かに母上に無礼を働きました」

「しかしここはどうか」

「御心を」

「わかつているわ。それなら」

それに頷いてであった。彼女は頷いた。

そうしてであった。そのうえで言うのであった。

「では」

前に出てだ。娘の亡骸を哀れむ目で見ていた。そうしてだった。

右手を前に出してかざした。するとそこから白い眩い光が放たれて。娘の亡骸を包んだ。

そうして彼女の亡骸は天にあがりだ。あるものになった。それは。

「星……」

「星にですか」

「星に転生させて頂けるのですね」

「せめて星になって」

「コワトリクエはその星を見上げて言った。アステカでは星は神とされているのだ。」

「そしてまたそこで瞬いていて。これからは」

「姉上、どうかここはです」

「御心を鎮められて」

「どうか」

弟神達も妹神達もだ。それぞれ言う。その星を見上げてだ。

「そして今は天界で」

「お過ごし下さい」

自然に祈っていた。星になった姉神を見上げながら。

「コヨルシヨウキは今も夜空にいる。そしてそのうえで瞬きを見せ
ている。今彼女が何を考えているのかはわからない。しかし彼女は
今もいる。夜空に瞬き続けている。不義もそこで見ているがそれ
についてどう考えているかはわかりはしない。だがそこに今もいる
のである。」

星になった女神

完

2010・6・5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8940p/>

星になった女神

2011年1月2日21時25分発行